

Golf Course Management & Maintenance Magazine

令和5年2月1日発行
(毎月1回1日)
第56巻第2号

ゴルフ場セミナー

2月号

ゴルフブームを見極める
働きやすいゴルフ場になる
子どもたちのためにできること



ゴルフダイジェスト社

今月のティオフ

今では月3回プレーし、日本障害者ゴルフ協会の代表理事を務めるなど、ゴルフは私の人生になくてはならないものになっているが、始めてから20年ほどはお付き合いでプレーする程度で、それほど好きではなかった。

ゴルフに触れたのは27歳のとき。就職した小さな出版社の社長兼上司がゴルフが大好きで、練習場に連れて行かれ、7番アイアンで打つことから始めた。ボールに当たらずつまらないし、すぐに止めようと思ったが、上司は練習場に行こうと誘ってくる。3カ月後にコンペに参加した。ティーショットで5回空振りしていたたまたまない気持ちになったが、ほぼ7番アイアンでなんとかラウンドできた。

初ラウンドは苦い経験であり、運動や早起きは苦手で嫌いだ。それでも止めなかったのは、上司の熱心な誘いに加え、ゴルフ場の非日常空間が気持ちがよく、チームスポーツではなくマイペースで練習できるのもよかったからだ。

転機は、患者の要望によりゴルフをリハビリに取り入れていた、国立身体障害者リハビリテーション

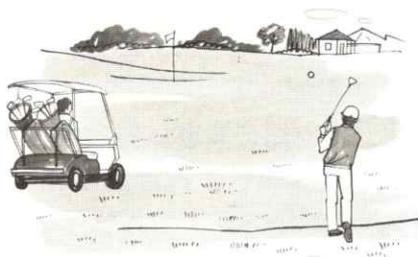
乗用カーのコース内乗り入れなど 誰もが楽しめる環境づくりを

松田治子 (特定非営利活動法人日本障害者ゴルフ協会 代表理事)

ンセンターの運動療法士長、水田賢二氏との出会いだ。取材の際に、障がい者のゴルフ大会を開きたいが受け入れてくれるゴルフ場がないと聞き、ゴルフ好きの上司は友人のゴルフ場オーナーに頼んで「第1回日本障害者オープンゴルフ選手権」(1996年11月)を企画。大会事務局を買って出た。必然的にその手伝いに駆り出されたが、参加者が障がいを克服してビッグドライブをする姿を見て、刺激を受けた。早起きがイヤなどと文句は言っていられない。それから本格的にゴルフに取り組み、今ではゴルフを長く楽しむために、体力づくりも行うようになった。

その大会を機に当協会の活動がスタートし、事務局長から代表理事となった上司の後を受け、2021年5月に代表理事となった。現在、公式競技を年3回開催するほか、関東は月例会を毎月、中部と関西では定例会をほぼ毎月開催し、レッスン会も行っている。脳卒中で半身麻痺となり、ゴルフはできないと諦めていた人が協会を通じて再開したり、若い人がレッスンを受けて始めたり、彼らが笑顔でゴルフを楽しんでいる姿を見ると、携われてよかったと思う。プライベートのゴルフは、義足など障がいのある友人とのプレーも多いので、乗用カーのフェアウェイ走行が可能でゴルフ場を選ぶことが多いが、選択肢は少ない。シニア層に長くゴルフを続けてもらうにも、フェアウェイ乗り入れは必須だと思いが……。

イラスト・小野塚綾子



佐賀県
岡山県
岐阜県